鷲津

城と史跡を歩く会＊第３３回

夏期研修会資料

１）　１１代将軍家斉とその女たち　山岸弘明

２）　新選組から見た幕末　竹内　克

平成１６　年８月４日（水曜日）

会場＝八幡公民館視聴覚室

城と史跡を歩く会

１１代将軍家斉とその女たち

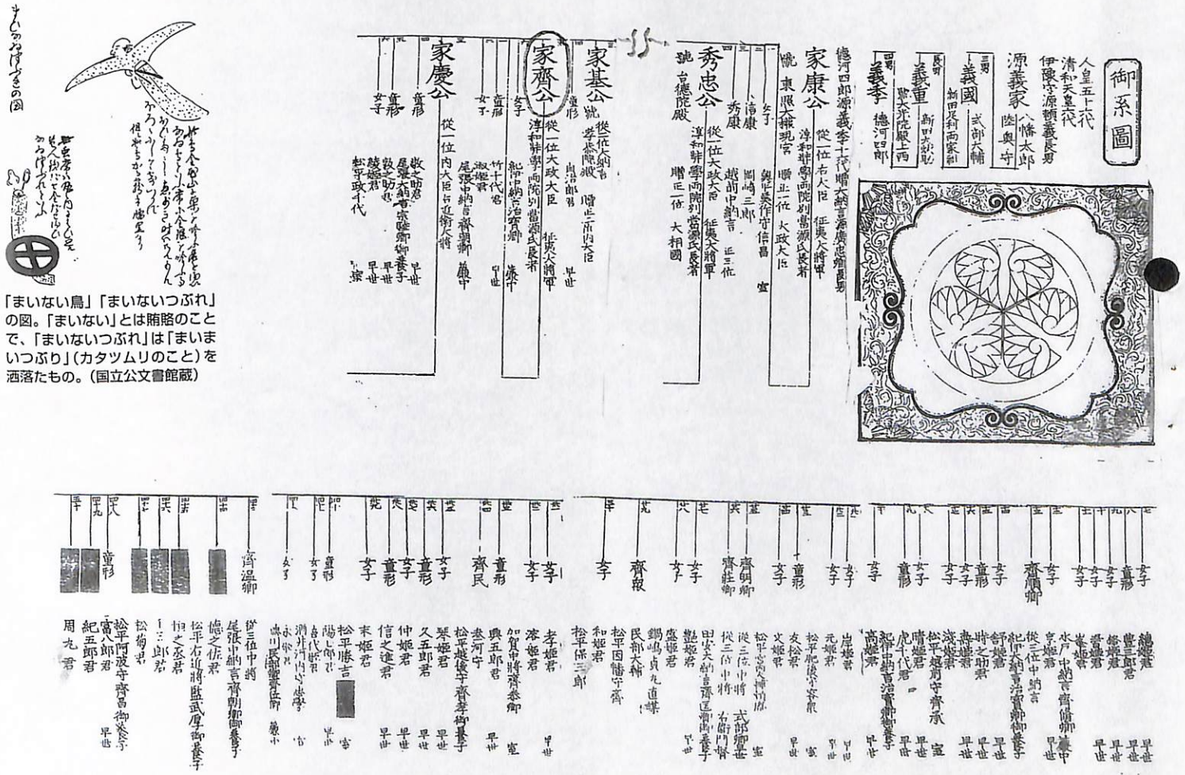
山岸弘明

はじめに

徳川家斉を「徳川幕府の崩壊を早めた将軍」といってもいいだろう。松平定信が辞任し、「寛政の改革」を引継いだ松平信明も亡くなると、寵臣水野忠成を老中首座に登用する。もはや自らに歯止めをかける人物はだれもいない。家斉の大奥での豪奢な消費生活はますますエスカレートして行った。家斉の浪費は相次ぐ貨幣改鋳で賄われた。この結果、貨幣価値が下がって深刻なインフレが庶民を圧迫する。田沼時代のまいない政治が復活、政治は停滞し、生活に苦しむ庶民の不満が高まっていった。

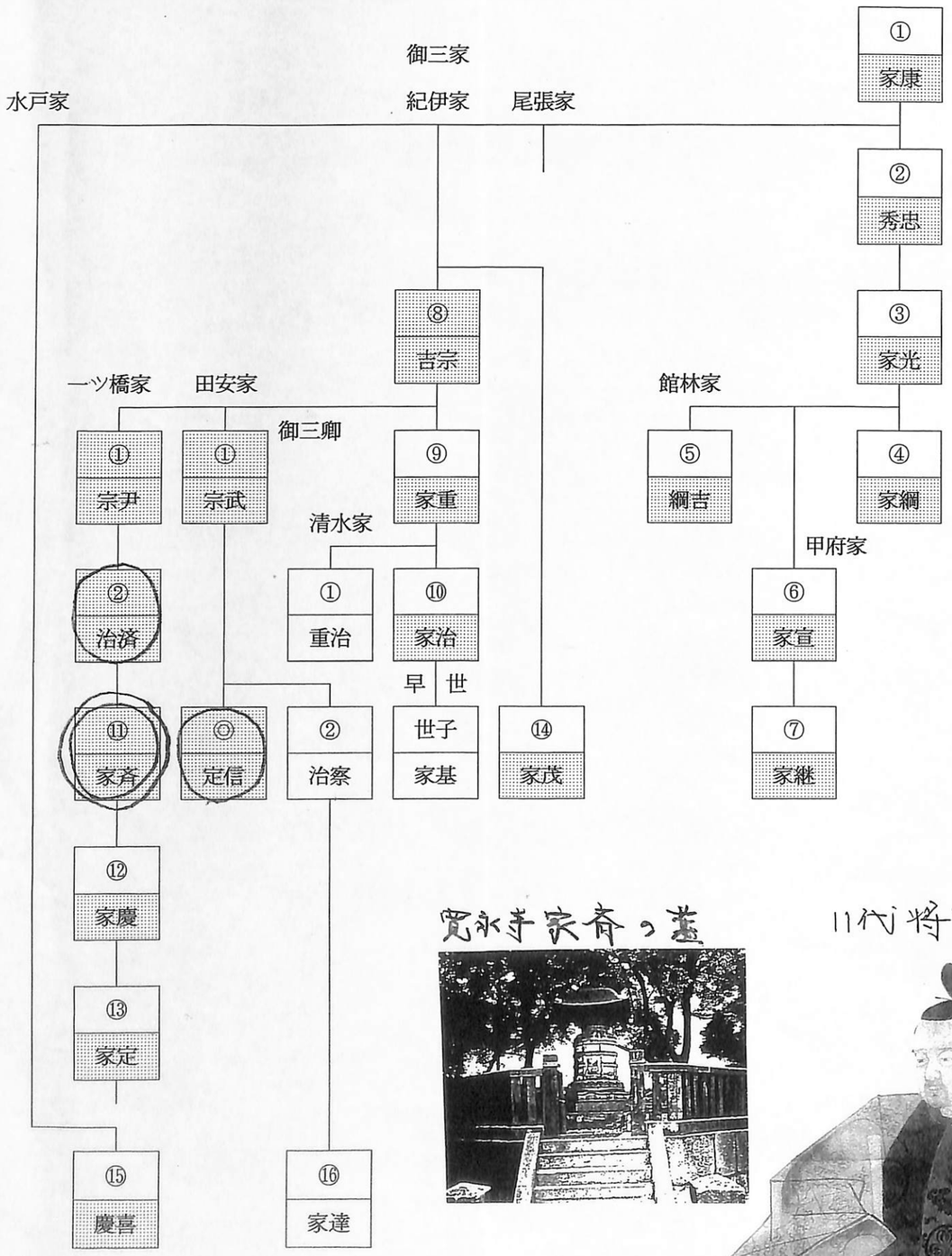
キーワード

①まいないつぶれの図
　歴史教科書にも載って有名な「まいないつぶれ」、これまで田沼のまいない政治批判とされてきたが、最近では３翁島津重豪ら大御所取り巻きたちのわいろ政治を批判したとの見方に変わっている。
②白河の水の流れは清けれど元の流れの田沼恋しき
③水野出てもとの田沼になりにけり



「まいない鳥」「まいないつぶれ」の図。「まいない」とは賄賂のことで、「まいないつぶれ」は「まいまいつぶり」（カタツムリのこと）を洒落たもの。（国立公文書館蔵）

徳川将軍家系図



寛永寺家斉の墓

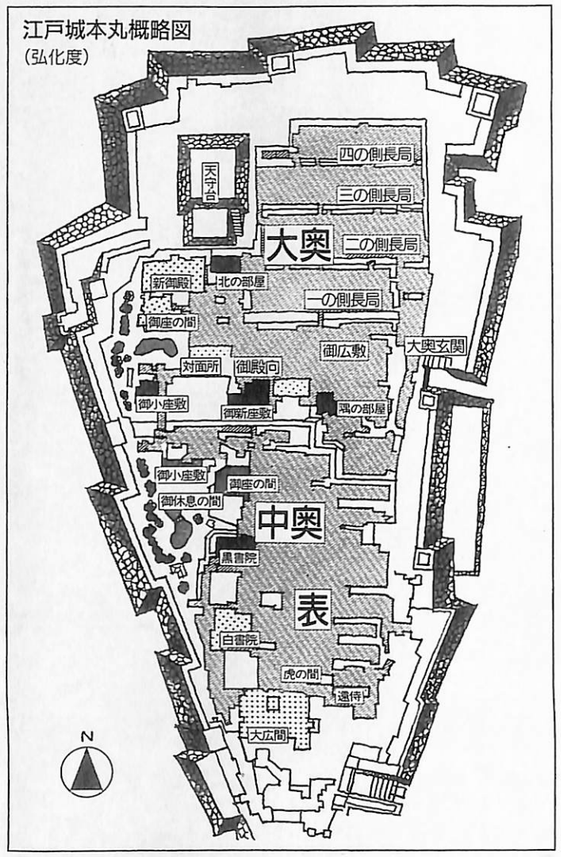
11代将軍家斉

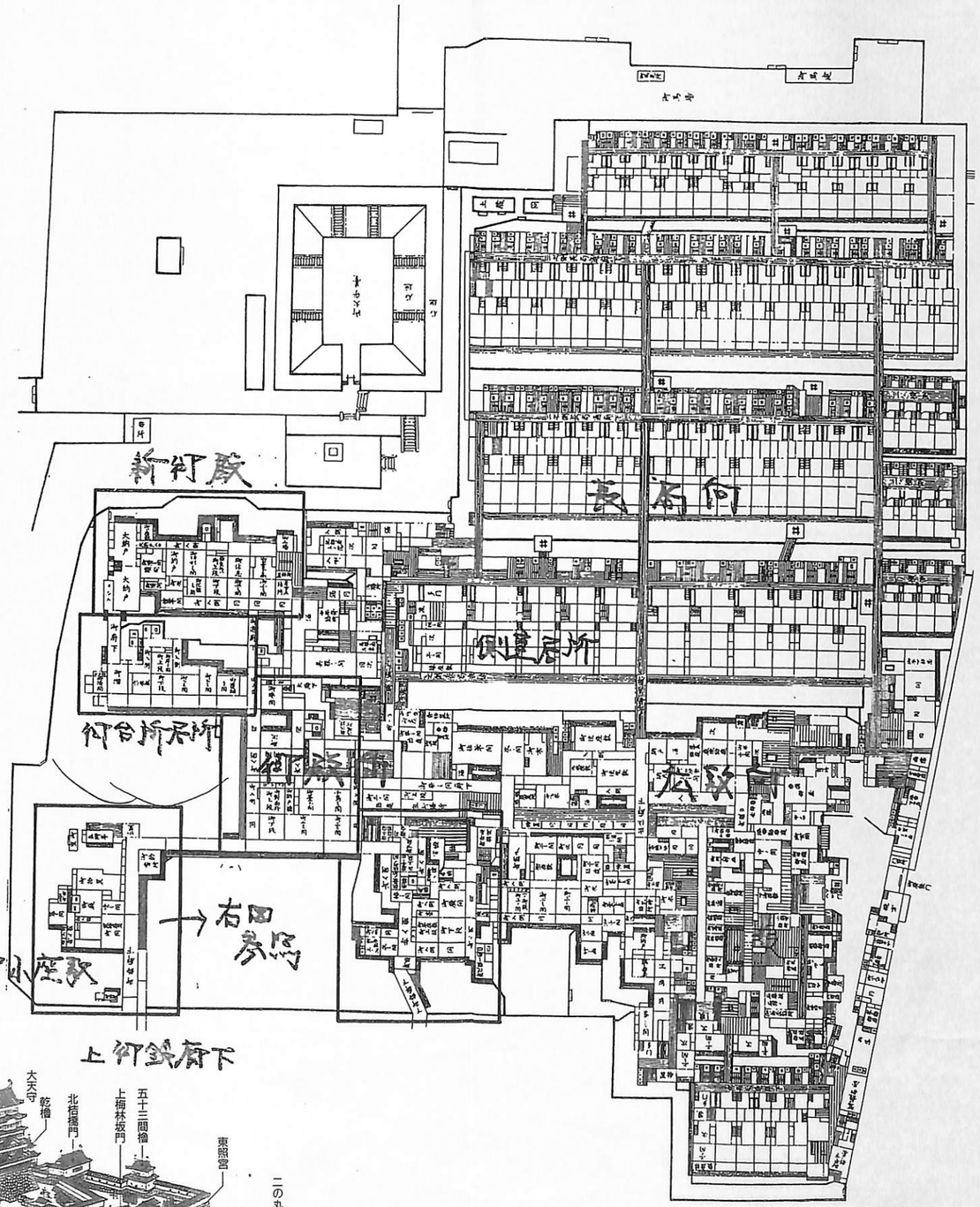
3-4

徳川家斉年表

年号	西暦＝数え	徳川家斉年表	首席老中	主な出来事
安永	2年1772＝1才	家斉、篤姫誕生	田沼意次	
〃	3年1773＝2才			
〃	4年1774＝3才			杉田玄白解体新書なる
〃	5年1775＝4才	家斉、篤姫婚約		
〃	6年1776＝5才			平賀源内エレキテル完成
〃	7年1777＝6才			
〃	8年1778＝7才			
〃	9年1779＝8才		田沼時代	
天明元年	1780＝9才	将軍家養子、西の丸に入る		
〃	2年1781＝10才	元服、従二位権大納言		
〃	3年1782＝11才			天明大飢饉
〃	4年1783＝12才			田沼意知暗殺
〃	5年1784＝13才			
〃	6年1785＝14才		失脚	
〃	7年1786＝15才	将軍宣下	松平定信	寛政の改革はじまる
〃	8年1787＝16才			打こわし、一揆多発
〃	9年1788＝17才	お満の方妊娠		
寛政元年	1789＝18才	婚姻、長女淑姫誕生早世	寛政の改革	棄損令を発す
〃	2年1790＝19才			人足寄場を作る、寛政異学の禁
〃	3年1791＝20才	お楽の方		
〃	4年1792＝21才	長男竹千代誕生早世	辞任	林子平を処罰、ロシア通商を求める
〃	5年1793＝22才	家慶誕生	松平信明	沿岸警備強化
〃	6年1794＝23才			
〃	7年1795＝24才			
〃	8年1796＝25才	お登勢の方		
〃	9年1797＝26才	お蝶の方		
〃	10年1798＝27才			近藤重蔵千島を探検
〃	11年1799＝28才			
〃	12年1800＝29才			伊能忠敬全国を測量
享和元年	1801＝30才			
〃	2年1802＝31才			
〃	3年1803＝32才		寛政遺老集団指導体制	
文化元年	1804＝33才			
〃	2年1805＝34才			延命院事件
〃	3年1806＝35才			
〃	4年1807＝36才			間宮林蔵樺太探検、フエートン事件
〃	5年1808＝37才			
〃	6年1809＝38才			
〃	7年1810＝39才	お美代の方		
〃	8年1811＝40才			ゴローニン事件
〃	9年1812＝41才			
〃	10年1813＝42才	溶姫誕生		近海に外国船出没激し
〃	11年1814＝43才			
〃	12年1815＝44才			このころ化政文化開く
〃	13年1816＝45才	右大臣		
〃	14年1817＝46才			
文政元年	1818＝47才		水野忠成	
〃	2年1819＝48才	お瑠璃の方		
〃	3年1820＝49才			
〃	4年1821＝50才			
〃	5年1822＝51才	従一位左大臣		
〃	6年1823＝52才			シーボルト鳴滝塾開く
〃	7年1824＝53才			
〃	8年1825＝54才		頽廃政治	異国船打払令
〃	9年1826＝55才			
〃	10年1827＝56才	太政大臣、最後の泰姫誕生		
〃	11年1828＝57才			シーボルト事件
〃	12年1829＝58才			松平定信没
天保元年	1830＝59才			
〃	2年1831＝60才			
〃	3年1832＝61才			
〃	4年1833＝62才			天保の飢饉
〃	5年1834＝63才		水野忠邦	
〃	6年1835＝64才			
〃	7年1836＝65才			各地に一揆多発
〃	8年1837＝66才	隠居、大御所、西の丸へ		大塩平八郎の乱、モリソン号事件
〃	9年1838＝67才			倹約令
〃	10年1839＝68才			蕃社の獄
〃	11年1840＝69才			
〃	12年1841＝70才	没、3侯人処分		天保の改革、株仲間解散
〃	13年1842	篤姫従一位叙任		アヘン戦争の情報入手
〃	14年1843		罷免	天保の改革失敗、水野忠邦罷免

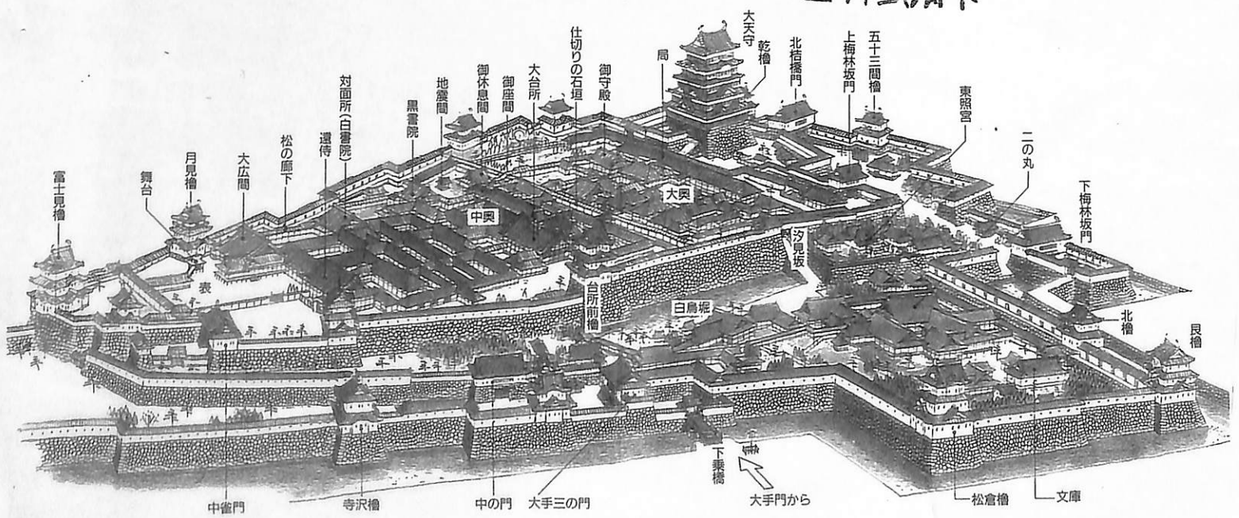
5-6

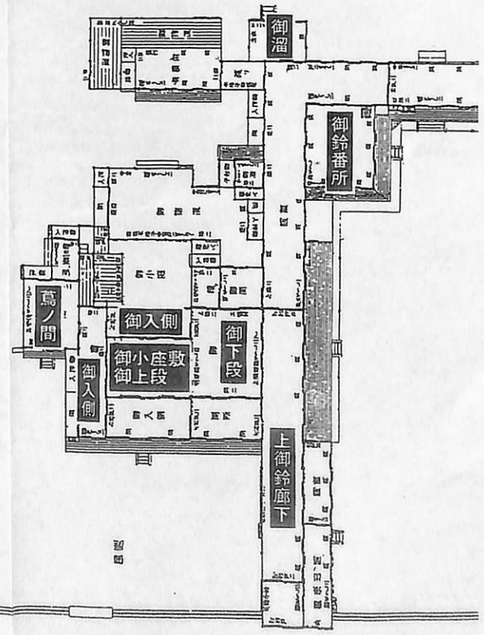




本丸大奥図

大奥跡





お鈴廊下と御小座敷

第１章　１１代将軍家斉とその時代

１）　江戸中期から後期へ、先代家治の時代

①　10代将軍徳川家治
江戸中期の元文２年、病弱で言語障害のはげしかった９代将軍家重の長男に誕生。幼く聡明の誉れ高く、祖父吉宗の期待を背負ったが、その治世は父の遺言に従って田沼意次を重用、自らは趣味に没頭して政治にかかわることはなかった。

②　２男２女を設けるがすべて早世。嫡男家基も18才で亡くし一ツ橋家斉を養子に迎える。

③　天明６年没、50才。上野寛永寺に葬る。法名「浚明院」、家綱霊廟に眠る。

２）　家斉の出自と治世

①　11代将軍徳川家斉
安永２年御三卿一ツ橋治済の長男に生まれる。生母は旗本岩本内膳正正利の娘お富の方で、８代将軍吉宗の曾孫にあたる。将軍家治の養子に迎えられ徳川宗家11代を継承。

②　将軍在位50年、その後も大御所として政治の実権を握った。
馬術や鷹狩りに習熟し、公務に勤勉だったとされる一方で側近政治を容認し、豪奢な頽廃政治を繰り返した。

③　家斉の将軍就任から大御所までの期間を「大御所時代」という。
その初期は松平定信による「寛政の改革」で
前期は定信の方針を継承した松平信明らによる「寛政の遺老」期、
後期は側用人出身の水野忠成、三佞人ら取巻きによる頽廃期と３分できる。

④　天保12年没、69才。上野寛永寺、家綱霊廟に眠る。法名「文恭院」。

３）　田沼意次と一ツ橋治済（さだ）の謀略

①　田沼意次
旗本６00石主殿頭意行嫡男。家重、家治に近侍、側用人、老中首座、相良５万石城主にすすむ。

②　意次の政策は農業中心から問屋、株仲間の育成強化による商業資本の活用にあった。印旛沼開墾、外国貿易の奨励など積極政策をすすめ、幕府財政もやや好転したかにみえたが、株仲間による談合がインフレを招いたりもした。たまたま起こった天災、飢饉と相まって幕府政治への不満が高まった。天明６年家治の急死で失脚、領地のほとんどを没収されて隠居を命ぜられ８年没。69才。

③　まいない政治＝このころワイロ政治横行。有力者に現金を送るのが当時の慣行であったが、贈賄側が商業資本にも広がり田沼邸はワイロをもって訪れる客で賑わったという。まいない政治、悪徳政治家の代表とされたのは後継老中松平定信の喧伝にもよった。

④　意次が肩入れした一ツ橋家の陰謀
将軍継承順位３位の一ツ橋家が２位の田安家をなくし予備血統を独占することを策略する。田安家の当主治察は病弱だが弟定信は利発で家治からも寵愛されている、将来強烈なライバルになりかねないとみて意次が白河松平家への養子話を強引に進めた。のち、この計画は現実になる。治察は病死して血統が絶え、家治の世子家基も夭逝して、長男家斉が11代将軍を継承することになる。もし定信が田安家にあれば、将軍により近い定信が次期将軍に選ばれた可能性が強い。定信がのち治済の大御所西の丸入りを阻止した背景にこんな事情もあった。

10代将軍家治(1737~86)は、若くして将軍に就いたが、早々に政治の世界から身を引き、絵や書などの趣味の世界に生きるようになった。(徳川恒孝氏蔵)

10代将軍 家治

人物新発見

趣味に生きた吉宗の秘蔵っ子将軍

田沼意次と同時代の松平武元（たけちか）は、32年の長きにわたって老中を勤め、名声の高かった大名だ。その彼でさえ、その間に加増されたのは７００石。一方の意次は、ほとんど２、３年おきに５０００石ほどの加増を受け、最終的には５万４０００石の大名となっている。

大奥の勢力を籠絡（ろうらく）して将軍に口添えをしてもらった、有力大名に賄賂（わいろ）を送ったなど、その出世にあたっては黒い噂が絶えなかった。それらはもちろん事実でもあるのだが、結局は、将軍家治にその実務能力を買われた、というのが出世の１番の理由だろう。

しかし、老中まで上りつめた意次も、１７８６年（天明６年）、後ろ楯（だて）となった将軍家治の急死により失脚を余儀なくされる。

田沼意次

田沼意次、老中への道

1751年（宝暦元年）
意次、御側衆・御用取次に進む。

1758年（宝暦8年）
意次、大名となって評定所に出仕する。

1760年（宝暦10年）
9代将軍家重(いえしげ)、家治(いえはる)に将軍職を譲る。

1767年（明和4年）
意次、２万石に加増され、10代将軍家治の側用人となる。

1772年（安永元年）
意次、老中となる。

４）　松平定信と寛政の改革

①　松平定信
定信は８代将軍吉宗の孫。宝暦８年、御三卿筆頭田安中納言宗武３男（実質２男）。安永３年白河10万石松平越中守定邦の養子。天明７年老中首座、８年将軍補佐役にすすみ田沼後の幕政を掌握、寛政の改革を断行する。その方針は田沼と正反対、重農政策と商業資本の抑圧、復古理想主義にあった。６年で辞任、文政12年没72才。深川の霊厳寺に眠る。

②　寛政の改革は新参譜代に対する門閥譜代の逆襲と捉えられるが、定信にとって田沼は、将軍どころか実家の三卿さえ継ぐことができなくされた恨み骨髄の相手。報復は過酷を極めた。

５）　寛政の遺老が改革を引き継ぐ

①　就任当初からやめるやめると牽制する定信、早く重しから開放されたい若将軍、定信の申し出を家斉が受け入れる形で６年後に退任。しかし、すぐには家斉の思いどおりにならない。

②　定信を後継した松平信明は同志の本多忠寿（かず）、戸田氏教（のり）、太田資愛（すけよし）、堀田正敦らと改革を持続するが、次々と中心人物が倒れる。

６）　水野忠成と家斉の親政

①　水野忠成（あきら）
父は旗本岡野肥前守智暁。はじめ旗本水野忠隣に養子、ついで宗家沼津５万石水野出羽守忠友養子に直る。文化９年側用人、世子家慶付き、文政元年老中首座。忠成は家斉とその実父や大奥に取り入る。「寛政の改革」は後退、家斉の親政が始まる。

②　取巻き三翁と三佞人
三翁＝将軍実父一ツ橋治済、御台所実父島津重豪、側室お美代の方養父中野清武
三佞人＝若年寄林忠英、側衆水野忠篤、小納戸頭取美濃部茂育

③　家斉は西の丸派と呼ばれた取巻きと大奥女性たちに囲まれて豪奢な消費生活を送る。その風が城内から江戸市中、全国に広がった。享楽、頽廃的気風は「化政文化」を生んだ。

７）　天保の改革

①　１２代将軍家慶
寛政５年家斉の嫡男に誕生。天保８年家斉の隠居で12代将軍を継承するが大御所政治が続いて、実権を掌握できたのは家斉没後から。水野忠邦をブレーンに「天保の改革」をすすめ、後期は土井利位、阿部正弘に老中首座を託した。嘉永６年ペルー来航緊迫のうちに逝去。61才。芝増上寺に葬り、法名「慎徳院」という。

②　水野忠邦
寛政６年生まれ、唐津藩主水野忠光の次男。浜松６万石に転封、西の丸老中をへて天保５年老中、13年家斉の薨去を待って「天保の改革」に着手、文武奨励、倹約励行、風俗粛清などを進めた。

③　その第１歩は前将軍のブレーンで老中をしのぐ権力を振るっていた西の丸派、中野碩翁ら３翁と３佞人の一掃であった。「天保の改革」が始まる。

12代将軍家慶が家斉から将軍職を譲り受けたのは１８３７年（天保８年）のこと。すでに45歳の壮年になっていたが、政事（まつりごと）の実権は依然として家斉が握っていた。家斉は西丸に隠居したとはいえ、何かにつけて幕政に口を出す。挙げ句には、家斉の側近たちまでもが権勢を欲しいままにしていたのである。

家慶はお飾りの将軍でどうすることもできない。老中たちが家慶に相談しても、特に論議するわけでもなく、ただ「そうせい」とのひと言のみで、ついたあだ名が「そうせい侯」。老中たちも陰では「上様」と呼ばず「そうせい侯」と呼ぶ有様である。結局、家斉が没するまで、家慶は「お飾り将軍」に甘んじたのだった。

徳川家慶は、実権掌握後天保の改革を行い、その後も内憂外患に対し幕府の危機打開を図ったが、志半ばで没した。(徳川恒孝氏蔵)

12代将軍 家慶

松平定信

水野忠成は旗本岡野氏の次男坊だったが、旗本水野忠隣（ただちか）の養子となった。そのとき、将軍世嗣時代の家斉の小姓として召し出されたのが、開運のきっかけになる。

１７８６年（天明６年）、家斉が11代将軍になると、その腹心として信任を深め、沼津藩主水野忠友（ただとも）の養子となって３万石の大名となった。以後、順調に出世し、１８１８年（文政元年）には老中にまで上りつめる。

将軍家斉が幕政から遊離してゆく中、家斉の寵愛あつい忠成は腹心を登用、幕政を牛耳り、「水の出てもとの田沼になりにけり」と川柳に詠まれるような賄賂（わいろ）政治を展開し、幕政を腐敗させてしまう。

忠成は民衆から、賄賂政治を展開した老中田沼意次の再来とみなされていた。(福寿院蔵／静岡県立中央図書館［歴史文化情報センター］提供)

水野忠成（アキタ）

第２章　大奥のしくみ

１）　大奥とは
①　将軍が政務を取る表向き、将軍の居所で官邸でもある中奥に対し、
　　将軍御台所、側室、子女などの居住空間をいう。
②　江戸城以外も表と奥を区別したが、大奥とはよばない。
③　大奥は男子禁制。働く大奥女性たちは５00～最大３,000人におよぶ巨大ハーレムでもあった。
④　３代将軍家光の乳母春日局が制度化。「大奥法度」などが整い、形式や儀礼が尊重された。

２）　将軍の使命は血統の継承
①　歴代将軍はおおむね少子派だが、家康、家斉、家慶、慶喜が10人以上の子供を設けている。
②　中に家斉は抜群で、正室１、側室16に53子を誕生させた。粗製乱造、多くは早世したが、成人を迎えた子供たちが全国の大名たちに配分されており、徳川家の繁栄に寄与したといえなくもない。

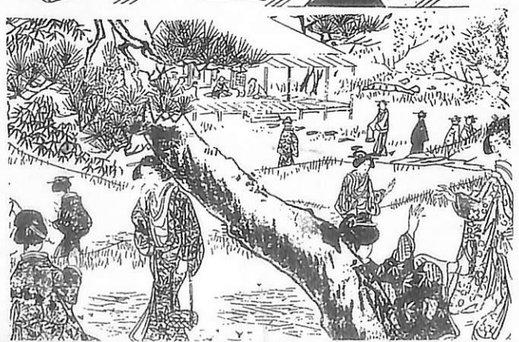
３）　大奥の構造＝大奥図面参照
①　大奥は建坪およそ６千坪、本丸御殿のほぼ６割を占めた。
②　その構成は御台所に仕える御殿向き、側室と働く女性たちの住む長局向き、
　　大奥に働く武士たちの広敷向けに分かれた。
③　御殿向き　御台所の生活
④　長局向き　側室たちの生活　１の側、１の部屋（様）、２の部屋（様）……
⑤　お鈴廊下　将軍専用の奥入り廊下。男子禁制

４）　大奥の制度と生活
①　主要職制
　　上臈＝京都から御台所の輿入れにしたがった公卿の娘
　　年寄＝大奥の一切を取り仕切る最高責任者。局、老女、巷間大奥の老中とも
　　中年寄＝側室、子女付き責任者。年寄を補佐し、事故あるとき代行
　　御客会釈（あしらい）＝将軍奥入りとりなし、三家三卿などの来客接遇
　　御中臈＝将軍、御台所などの身辺世話係。清の中臈、寵愛を受けて手つきまたは汚れの中臈
　　御坊主＝坊主頭で男装した50才くらいの女中。将軍の命を受けて表や中奥に出入りした。
　　御小姓＝御台所、簾中、姫君などの雑務係。成人して中臈に進む。
　　表使＝御広敷に勤め、表の御用人などと応接する外交官
　　御次（つぐ）＝旗本出身子女の最初の役職。仏間、台所、道具係などに配属された。
　　御右筆＝書記官。御錠口衆＝お鈴廊下の御錠口監視役
　　以上お目見え、以下には仲居、火の番、使番、御末、お犬子供、合の間、タモン、小僧など
②　お目見え
　　将軍または御台所にお目見えできる幹部大奥女性のこと。将軍奥入りの総触れは鈴廊下に並んで出迎える。一般女中は将軍の顔はもちろん後ろ姿さえみることはない。

将軍奥城ヶ

大奥跡

大奥の庭遊び



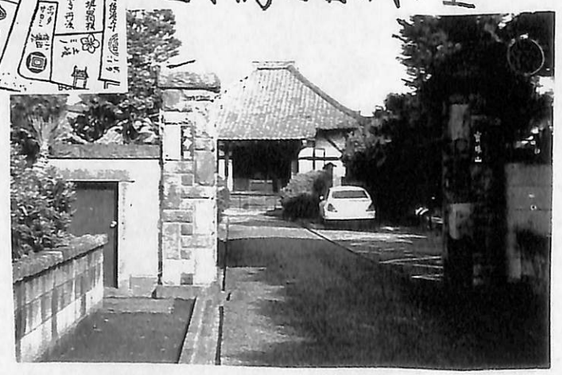
５）　玉の輿と蛍大名
①　氏なくして玉の輿にのる＝初期のころ、庶民から側室、将軍生母となった女性も少なくない。
　　家光の側室お楽の方（家綱生母＝罪人の娘）　　お玉の方（綱吉生母桂昌院＝八百屋の娘）
　　綱吉の側室お伝の方（徳松生母＝黒鍬者の娘）　家宣の側室月光院（家継生母＝住職の娘）
　　後期は将軍の側室が旗本の娘（養女）に限られたので原則として存在しない。
②　蛍大名＝将軍お腹様になると、縁にあやかった一家一門が栄進。親兄弟が士分に取り立てられたり、旗本は２、３千石からときにより万石の大名に。娘のお蔭で栄進した大名を「蛍大名」という。
　　太平の御世、加増の道の閉ざされた旗本たちは、競って自らの娘を大奥に上げた。
③　将軍側室への道＝旗本の娘は幹部候補生ともいえるお次、すすんで中臈に。将軍付き中臈から側室。
　　将軍側室は年寄上座の推薦、御庭御目見え、不時の手つきなど。
　　ときに風呂場で働く御末に子女を生ませた「お湯殿の子」も。
④　手つき中臈は世話係の部屋に同宿、筆頭中臈（１の部屋様）とお腹様が部屋を賜わる。
⑤　奥泊まり＝将軍といえども自由に奥泊まりできた訳ではない。月に10日ほどある忌日を避け、当日夕刻までに予約、10時ころお鈴廊下から上段の間、下段の間、次の間ほかを備えた小座敷へ。
⑥　寝具は４組、将軍、側室の両隣にお添寝とお坊主が付添い、次の間に不寝番も。
　　寝物語で綱吉の側室染子が柳沢吉保へ甲府１00万石の墨付をえた反省。おねだり防止対策。
⑦　おしとね辞退＝御台所、側室とも満30才で引退。御台所は身代わりとして自ら推薦の中臈を将軍に差出した。
⑧　側室たちの老後＝将軍が亡くなると御台所、側室とも髪を切って柩に収める。
　　御台所、世子生母ら一部は２の丸、３の丸に屋敷を貰ったが、大半は日比谷公園の御用屋敷（比丘尼屋敷）で余生を将軍供養に送る。将軍廟以外外出禁止、生涯親元に帰ることは許されない。家慶側室お琴は工事にきた大工との逢引きが露顕、兄の手で成敗された。

６）　乱れる綱紀と延命院事件
①　大奥の乱れは７代将軍家継と家斉時代に極まる。
②　延命院（日蓮宗＝荒川区日暮里９＝第２９回で案内）
　　慶安元年４代将軍家綱乳母三沢局開基。家光側室の安産祈願で無事家綱誕生。大奥の信仰厚かった
③　住職日潤（日道）は元役者、美男で言葉巧みに誘惑、密通。大奥で関係した女中59名
④　幕府は日潤を破戒僧として死罪、下女ころら下役６人を処分。上級女中への波及止める。

奥勤めを終へたすごろく

桜田ご用屋敷

延命院と日潤の墓



絵島生島事件

正徳四年（1714）正月、七代将軍の生母月光院のお気に入りとして羽振りを利かせていた大奥年寄りの絵島は、月光院の名代として芝増上寺に六代将軍家宣の墓参をした。しかし、肝心の墓参は早めに済ませて、当時人気歌舞伎役者だった生島新五郎がいる山村座に赴いて饗応を受け、城の門限に遅れてしまった。このことが城内に知られることになり、絵島が生島と密通していたとして事件になった。厳しい取り調べの末、絵島は信州高遠城へ流罪となり、素足で不浄門から引き出され、生涯幽閉された。山村座は取りつぶされ、生島と座長らは伊豆七島へと流され、絵島の兄白井平右衛門は死罪になるなど、数十人が罰せられた。

このころ大奥では、六代将軍家宣の正妻だった天英院と側室の月光院が対立していた。しかし、将軍の生母ということで月光院の力は大きくなった。男子禁制とされた大奥だが、月光院と間部詮房が深い仲であるという噂が流れるなど風紀が大変乱れていて、絵島生島事件は天英院派の新井白石らによる一種の見せしめだったともいわれている。

第３章　家斉をとりまく女たち

１）妻妾２３人、５３人の子福者

① 家斉は健康にも恵まれて生き長らえたが、生涯にかかえた側室は23人（一説では40人、50人）そのうち子を生んだ側室は16人をかぞえた。15才からの54才までの39年間に53人（ほかに流産４人）の子供を設けた、史上まれにみる絶倫将軍。

② しかし、子供たちの大半は成人に達することなく夭逝、粗製乱造のそしりも。

③ 子女誕生のたびに披露、祝儀を行うが17子以降中止。

④ 子女は成人して大名家にムコ入り、嫁入りさせなければならない。無理な押込みが続き、被害を受けた御三家、御三卿、諸大名の血統が混乱した。

⑤ 大奥は最盛期を迎えたが、必要経費は幕府経済を圧迫し、徳川幕府の終結を早めることにも。

２）御台所篤（とく）姫（茂子）

① 10代将軍家治代安永２年、薩摩77万石島津重豪の娘として芝藩邸に誕生。

② 祖母綱吉養女（のち吉宗側室、島津継豊室）竹姫の遺言に従い、４才の時同い年の一ツ橋豊千代（後の家斉）と婚約、９才で大手町一ツ橋屋敷に入る。同年、豊千代の江戸城西の丸入りに従う。

③ 寛政元年正式婚儀。将軍家御台所は代々、皇室、公卿から迎えるしきたりで、篤姫も近衛右大臣経ひろ養女となる。７年７子敦之助を誕生するがわずか４年のはかない運命に終わる。

④ 西の丸時代、御縁女さま、姫君、御台所時代、御台様、隠居後大御台様。寛永11年正三位。

⑤ 弘化元年72才で逝去。芝増上寺に葬り「広大院殿起誉妙勝貞忍大姉」。個人墓は昭和20年４月戦災損壊、２代将軍秀忠御台所お江らの将軍家子女墓に合祀されている

⑥ 篤姫の父重豪は正三位に叙任、西の丸取巻き３翁の１人として権勢を振るう。財政難の折り幕府支援を仰ぎ、密貿易の資金を得ている。この利益がその後の斉彬、久光時代、倒幕の大業の原動力となったのは何とも皮肉な巡りあわせであった。

３）１２代将軍家慶生母お楽の方（聡子）

① 旗本５00石小姓組押田藤次郎敏勝の娘。押田家は１千石に加増。

② 天明７年奥勤め、先代将軍家治の娘種姫付き中臈。輿入れで赤坂紀伊御守殿にしたがうが、本丸中臈に呼び戻されて、寛政５年４男敏次郎、後の12代将軍家慶を誕生、中臈上座をへて年寄上座に進む。世子生母として大奥に隠然たる存在感を示したが、将軍就任を待たない文化７年逝去、45才？従三位を追贈。「香琳院殿正諦映心大姉」。

③ 墓は上野寛永寺御台所墓地手前右列、全高３ｍの宝塔だが、石塀に隠れて垣間見ることもできない。

４）側室お美代一族の盛衰

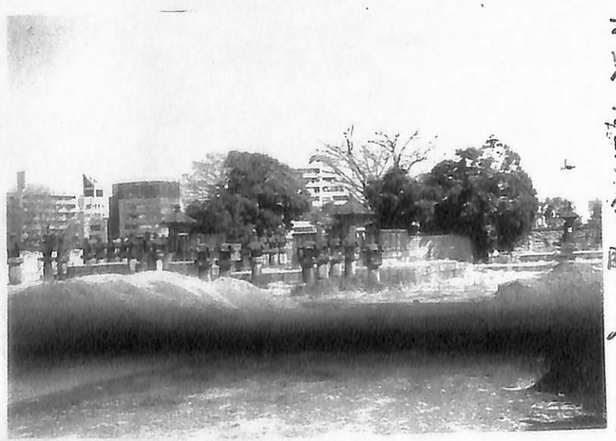
① お美代の方＝栄耀栄華から孤独死、波乱の生涯
旗本３00石中野播磨守清武の養女。実は中山法華経寺内智泉院住職日敬の娘。菩提寺娘の美貌と才知に目をつけた清武が大奥に送り込む。

② 文化３年御次、７年手つき中臈、10年34子溶姫、12年39子仲姫（早世）、14年41子末姫を誕生、溶姫は文政９年加賀１00万石前田斉泰に輿入れ、東京大学赤門はこの時の御守殿門。末姫も天保４年広島42万石浅野斉粛に輿入れ。

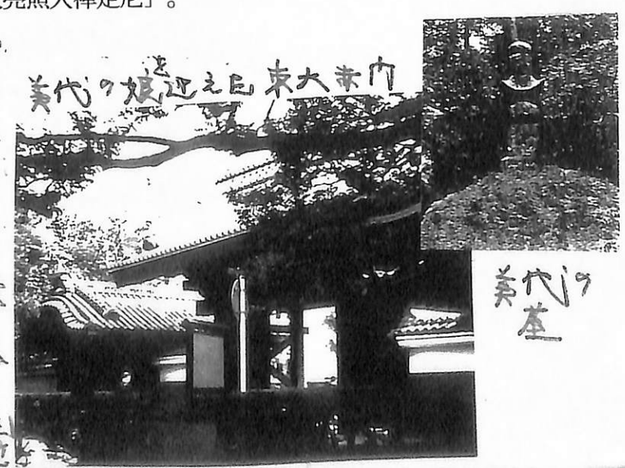
③ 養父清武（石翁）は小姓、小納戸頭取２千石に栄進、大名、旗本の任官の口きき、莫大なワイロをえるが、天保の改革で５00石に降格。墓は池上本門寺と杉並松の木の大法寺。それぞれ「高運院殿従五位下前播磨守石翁日勇大居士」を刻む。本門寺で清武と室の墓を案内。

④ 実父の智泉院は朱印53石、将軍家祈禱所に昇格、大奥女性の参詣、代参で賑わうが、一方でいかがわしい噂も。天保12年家斉の死を待って手入れ、日敬は女犯の罪で遠島と決まるが牢死。71才。

⑤ お美代は家斉の逝去にあたり、養父中野清武ら３翁、３佞人と組んで溶姫の生んだ孫、前田犬千代を家慶の養子として次期将軍とするニセ遺言状を作るが露顕して押込め、大奥追放。明治５年無住の本郷講安寺で逝去。あまりにも寂しい最後であった。いったん駒込長元寺に埋葬されたが前田家の墓所金沢野田山に改葬。法名「専行院殿舜沢亮照大禅定尼」。



お墓（お子多の眠る谷中墓地）



美代の娘を迎えた東大赤門

美代の墓

５）多彩な側室たち

① お満（万）の方
旗本御納戸頭取平塚伊賀守為喜の娘だが生年は不詳。家斉より３～５才年上とみられる。家斉が家治の養子として西の丸に迎えられたころ大奥御次。14才で将軍宣下した早熟の家斉の手つき中臈となる。寛政元年長女淑姫を誕生。同年大奥女中最高位の老女（年寄）上席にすすんで合力１50両、20人扶持を受ける。淑姫は家斉の弟の子一ツ橋斉朝に輿入れ、斉朝の尾張養子で10代藩主夫人となった。お満はその後、１男、２女に恵まれたがいずれも早世、とくに寛政４年の長男は徳川家ゆかりの竹千代と名付けられ、西の丸に移って世子と定められたが満１才に達することなく息絶える。30才のときお褥辞退。世子生母としてお内証の方とされたが、天保６年逝去。法名「勢真院登誉宝岸了智大姉」芝増上寺の将軍家子女墓に合祀されている。

② お楽の方＝前出

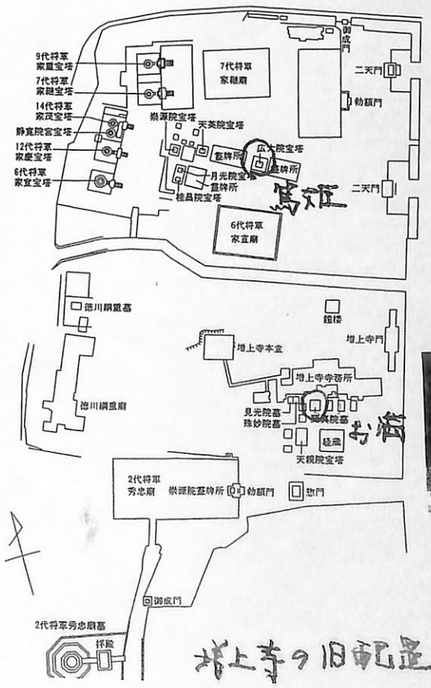
③ お梅の方
旗本小姓組水野権十郎忠芳の娘。寛政４年本丸奥勤め、お満の方の子淑姫抱守となり、寛政４年手つき中臈、６年女子を出産するが、幕府正史は「御名未被進」、命名前に夭逝したことがわかる。お梅も産後のひだち悪く、桜田御用屋敷内の養生所で治療にあたったが逝去。「真性院殿清香如蓮大姉」と諡（おくりな）、小石川伝通院の千姫墓近く、およそ１ｍ50の位牌型墓碑に眠っている。

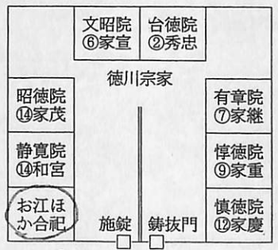
④ お宇多の方（お満天）
旗本小普請組水野内蔵丞忠直の娘。寛政４年本丸御次、翌５年手つき中臈、７年敬之助を生む。敬之助は尾張宗睦養子となるが３才で早世、その後10子豊三郎、11年12子五百姫、16子□姫と３子を出産するがいずれも夭逝した。天保２年上臈年寄。家斉没後は落飾して２の丸に居住、嘉永４年没、墓地は谷中徳川家女子墓地とするが確認できない。法名は「宝池院恵月心明大姉」。

⑤ お志賀の方（永岡）
旗本大番組頭能勢市兵衛頼能の娘。先代家治期に奥勤め、寛政４年改めてお次、同年手つき中臈。寛政９年９子総姫を生んでお客会釈を兼ねる。しかし満１才に達することなく没し、お志賀も病のため文化11年桜田御用屋敷で逝去。「彗明院殿智岳貞輪大姉」、小石川伝通院葬、位牌型。

⑥ お利尾の方（里尾）
旗本書院番朝比奈舎人矩春の娘。寛政６年本丸お次、８年手つき中臈となり、11子格姫を生んだが早世。利尾も健康を損ね、13年桜田御用屋敷で逝去、墓所は小石川伝通院で「超操院殿暁岳恵雲大姉」を刻んでいる。

⑦ お登勢の方（糸）
旗本小普請組梶久三郎勝俊の娘。寛政５年世子家慶付き御次、８年手つき中臈、12年13子峰姫、享和３年18子寿姫、文化２年20子晴姫を生む。峰姫は成人して水戸徳川家に輿入れ、残り２人は薄命に終わる。天保３年病のため桜田御用屋敷において他界、小石川伝通院「妙操院殿性月良仁大姉」。





お満

お梅　おくり

増上寺の旧転墓と現在の墓

本門寺の中野清武夫妻の墓

⑧　お蝶の方（八百、伊野）
旗本西の丸新番組曽根弥三郎重辰の娘。寛政８年本丸御次、翌９年手つき中臈、享和元年14子享姫、３年17子時之助、文化３年21子虎之助、文化６年25子友松、７年28子斉荘、10年32子和姫、12年38子久五郎と７人の子宝に恵まれるが粗製乱造のそしりを免れない。成人に達したのは斉荘と和姫の２人にすぎない。その斉荘は子女配分の見本のように盥回しされた。はじめ三卿筆頭の田安家に養子、田安家の男子を廃嫡させた強引な押込めムコで、結果三卿は一ツ橋系に統一された。ところが尾張徳川家に養子となっていた兄斉温が20才の若さで亡くなると横滑り再養子、尾張家の猛反対を押切って12代藩主に就任した。お蝶は家斉没後落飾して２の丸に移り、嘉永５年没、上野寛永寺葬、谷中徳川女子墓地とされるが墓は池上本門寺にある。「速成院妙智円成大姉」。

⑨　お美代の方＝前出

⑩　お以登の方（波奈）
旗本奥右筆組頭高木新三郎広充の娘。文化10年本丸御次、手つき中臈。12年37子琴姫を生むが早世、文化２年44子永姫を出生、永姫は三卿田安斉まさの４男豊之助と婚約、のち一ツ橋家両養子に。翌３年42子斉善が誕生、斉善は福井松平斉承の養子で福井75万石太守に、51子斉省は川越10万石松平家、52子斉宣も明石10万石松平家藩主に迎えられた。お以登の方は天保12年家斉逝去後も年寄上臈として大奥に残り、のち落飾２の丸に移る。嘉永３年没、上野寛永寺、谷中徳川女子墓地「本輪院殿妙珠日真大姉」。残念ながら確認できない。

⑪　お袖の方（保能）
旗本御船手頭吉江左門政福の娘。享和２年本丸３の間勤め、文化元年御次、３年手つき中臈、14年間に３男４女を設けるが成人は１男１女に過ぎない。文化６年26子の文姫は高松12万石松平頼胤に輿入れ。文政３年47子斉かつを誕生、８才のとき三卿清水10万石を継ぐが、水戸徳川家からも再養子の申し出があった。この縁組は斉昭派の巻き返しで阻止されたが、その後の俗論派と天狗党対立に引継いだ。文政13年没、上野寛永寺、谷中徳川女子墓地「本性院殿観妙諦普光大姉」。墓碑の確認はできない。

⑫　お八重の方
旗本小普請組土屋忠兵衛知光の娘。大奥雛遊びで認められて奥入り、文化５年本丸御次、同年手つき中臈、翌年からの13年間に男６人、女２人の子宝に恵まれる。27子斉明は伏見宮家姫と婚礼、文政３年三卿清水10万石で従三位左中将式部卿に進んだ。30子の盛姫は佐賀35万石鍋島貞丸に輿入れ、化粧料３千両と５百俵を持参金としたが鍋島家も日比谷公園邸に御守殿造営など巨額の出費が重なった。31子斉衆は鳥取32万石池田斉としの娘に押しつけムコ養子、まだ若かった斉としにすぐ男子が出生して悔いが残った。36子斉民はわずか４才で津山５万石松平斉孝ムコ養子、こちらも長男を押し退けての縁組で５万石の引き出物がついた。安政２年家督を本来の嫡男に譲って隠居、明治元年、徳川宗家を継承した家達を後見している。43子は喜代姫、姫路15万石酒井忠学に輿入れ、この時、格式を超えた門を建てた家老が切腹するという事件が起こった。46子の斉良は館林５万石松平武厚の養子、５千俵の加増。49子斉裕も徳島22万石蜂須賀家養子に迎えられた。お八重は天保12年家斉逝去で剃髪（一説落飾なし）、年寄上座にすすみ14年逝去。上野寛永寺谷中徳川女子墓地「皆春院（以下不詳）」。墓碑の確認はできない。

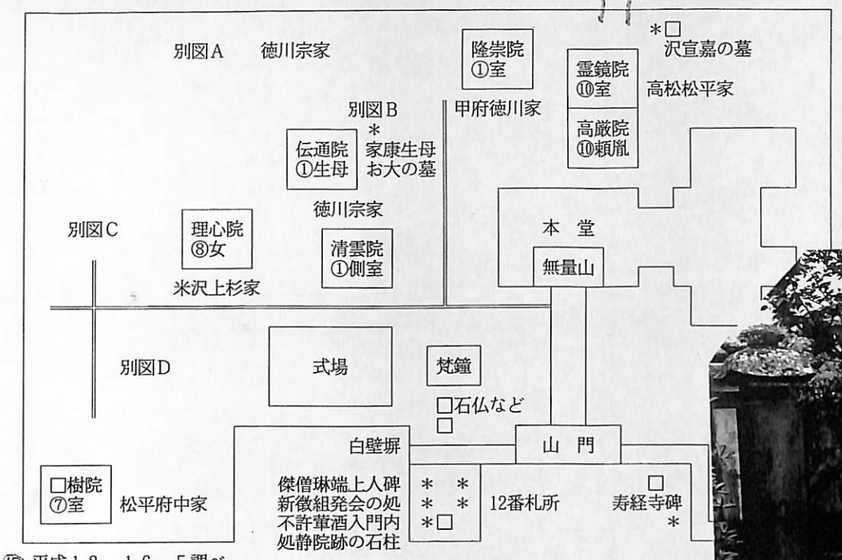
⑬　お美尾の方
旗本西の丸小姓木村七右衛門重勇の娘。寛政５年本丸御次、10年手つき中臈、享和３年19子浅姫を出産、浅姫は仙台62万石伊達政之助と縁談が整うが相手の政千代が早世したので沙汰やみ、改めて越前72万石松平斉承に輿入れ、２万石加増の持参金がついた。お美尾は文化５年病をえて桜田御用屋敷で逝去、墓所は小石川伝通院で「芳心院殿柔順蓮薬大姉」。

⑭　お屋知（八千、喜曽、利尾）の方
旗本書院番諸星千之助信邦の養女で実は新番大岩庄兵衛盛英の娘。享和元年本丸呉服の間勤め、翌２年御次、文化元年中臈となり、３年22子高姫を生むが早世、５年24子元姫を出生、14才のとき会津23万石松平蓉衆に輿入れしたが６か月後急逝。お屋知も文化７年桜田御用屋敷で病死、墓所は小石川伝通院で「清昇院殿□林慈照大姉」。

⑮　お八百（喜宇）の方
旗本西の丸御納戸阿部九右衛門正芳の娘だが伯父先手組弓頭阿部勘左衛門正□の養女として奥入り、文化７年お屋知の方の後御次に補充された。同年手つき中臈、10年35子与五郎を生むが６か月で早世、お八百も産後のひだち悪く桜田御用屋敷で逝去、小石川伝通院「智照院殿晧月彗忍大姉」。

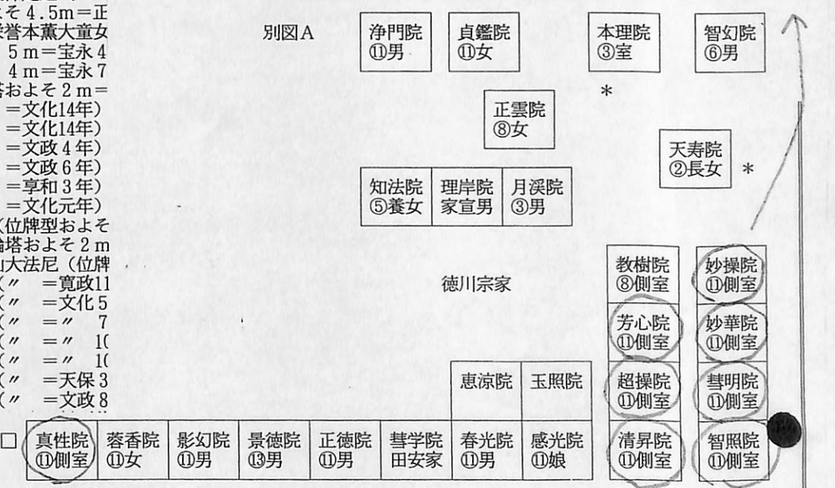
⑯　お瑠璃の方（やを）
旗本小姓衆戸田四郎右衛門政方の娘。文政４年大奥小姓。７、８才で大奥に上がり御台所や将軍子女の世話をする。本来、生涯清の中臈だが、家斉はこれにも手を付けた。文政２年本丸中臈に直り、同年45子斉温、10年に家斉最後の子供となる53子泰姫を生む。斉温はいったん三卿田安斉まさの愛姫のムコ養子。当時田安家にはすでに兄要之助が愛姫の姉のムコ養子に入っていた。文政５年尾張徳川家に再養子、これも複雑で義父は実の兄斉朝、３代にわたって家斉の子供を押付けられ、名門尾張家の血統は大きく改変された。お瑠璃は家斉没後も落飾せず上臈上座となる。弘化元年没。墓は上野寛永寺谷中徳川女子墓地と池上法養院（旧妙教庵墓地）の２か所、ともに法名「青蓮院殿妙香日寿大姉」。法養寺のそれはおよそ１m強の変形宝塔だが、本丸老女華島、瀧山などを刻んだ数10基の大奥女性たちに囲まれ、権勢を誇った往時を偲ばせている。

以上



平成１２、１６－５調べ

徳川宗家
①家康生母水野忠政娘お大＝伝通院殿蓉誉智香大禅定尼（宝篋印
①〃　側室長谷川藤直娘奈津＝清雲院殿心誉光質大禅定尼（〃
②秀忠長女千姫（豊臣秀頼、本多忠刻室）＝天樹院殿栄誉源法松
③家光室鷹司信房娘孝子＝本理院殿照誉円光徹心大禅定尼（〃
③〃　２男亀松＝月渓院殿華屋尊英（宝篋印塔およそ４.５m＝正
⑤綱吉養女喜知姫（尾張徳川綱誠娘）＝知法院殿栄誉本薫大童女
⑥家宣２男家千代＝智幻院殿露月涼華大童子（〃　５m＝宝永４
⑥〃　３男大五郎＝理岸院殿月光秋華大童子（〃　４m＝宝永７
⑧吉宗長女吉姫＝正雲院殿皓月曜心大童女（五輪塔およそ２m＝
⑪家斉15男久五郎＝浄門院殿暁覚幻夢大童子（〃　＝文化14年）
⑪〃　16男信之進＝影幻院殿花岳俊英大童子（〃　＝文化14年）
⑪〃　17男陽七郎＝正徳院殿陽光和順大童子（〃　＝文政４年）
⑪〃　23男富八郎＝春光院殿芳林智英大童子（〃　＝文政６年）
⑪〃　８女ゆき姫＝感光院殿蒼岳芳倫大童女（〃　＝享和３年）
⑪〃　９女寿姫＝蓉香院殿映清涼池大童女　（〃　＝文化元年）
⑪〃　側室水野忠芳娘梅＝真性院殿清香如蓮大姉（位牌型およそ
⑫家慶14男長吉郎＝景徳院殿理証玉英大童子（五輪塔およそ２m
⑧吉宗側室稲葉定清娘久逸＝教樹院殿曜誉光託智仙大法尼（位牌
⑪家斉側室朝比奈矩春娘里尾＝超操院岳彗雲大姉（〃　＝寛政11
⑪〃　木村重勇娘美尾＝芳心院柔順蓮藻大姉（〃　＝文化５
⑪〃　諸星信邦娘八千＝清昇院□林慈照大姉（〃　＝〃　７
⑪〃　阿部正芳娘八百＝智照院晧月彗忍大姉（〃　＝〃　1(
⑪〃　能勢頼能娘志賀＝彗明院智岳貞輪大姉（〃　＝〃　1(
⑪〃　梶久勝俊娘登勢＝妙操院性月良仁大姉（〃　＝天保３
⑫家慶側室太田資寧娘加久＝妙華院香屋清薫大姉（〃　＝文政８



歴代将軍家廟

将軍名	葬地	墓塔形式	墓塔材質	墓塔造立年次	銅棺	木棺	埋葬体位
初代 家康	久能山	1多宝塔	木造	元和元年・1615			
	→日光山	2宝塔	石造	寛永18年・1641			
		3宝塔	唐銅	天和３年・1683			
2代 秀忠	芝　増上寺	宝塔	木造	寛永９年・1632		1（桶）	蹲踞
3代 家光	日光山	1宝塔	石造	承応元年・1652	—		
	（上野に供養塔）	2宝塔	石造	承応元年・1652			
	日光山	3宝塔	唐銅	天和３年・1683			
4代 家綱	上野　寛永寺	1宝塔	石造	延宝９年・1681			
		2宝塔	唐銅	貞享２年・1685			
5代 綱吉	上野　寛永寺	宝塔	唐銅	宝永６年・1709			
6代 家宣	芝　増上寺	宝塔	唐銅	正徳３年・1713	1	1	胡座
7代 家継	芝　増上寺	宝塔	石造	享保２年・1717	1	2	不明
8代 吉宗	上野　寛永寺	宝塔	石造	宝暦２年・1752			
9代 家重	芝　増上寺	宝塔	石造	宝暦12年・1762	1	5	正座
10代 家治	上野　寛永寺	宝塔	石造	天明７年・1787			
11代 家斉	上野　寛永寺	宝塔	石造	天保12年・1841	1	3	
12代 家慶	芝　増上寺	宝塔	石造	安政元年・1854	1	2	胡座
13代 家定	上野　寛永寺	宝塔	石造	安政６年・1859			
14代 家茂	芝　増上寺	宝塔	石造	慶応３年・1867	1	3	胡座
15代 慶喜	谷中	土饅頭		大正２年・1913			
追贈 綱重	小石川伝通院						胡座
	→芝増上寺						

新選組から見た幕末

竹内克

新選組関連年表

1862年（文久2）	12／8	清河八郎の建言書、幕府が採用
1863年（文久3）	2／8	近藤勇ら浪士組、京都へ出発
	2／23	浪士組、京都壬生村に分宿
		（夜、清河が主要隊士を前に尊王攘夷を宣言）
	2／24	清河、建白書に血判を集め朝廷に提出
	2／30	浪士組に勅諚下る（3月13日東下）
		（近藤など13名が清河に異議を唱える）
	3／12	近藤ら会津藩お預かりになり、壬生浪士組を名のる
	4／13	清河八郎、江戸で斬死
	8／18	8月18日の政変（壬生浪士組、御所を警護）
		（政変以降、新選組の名くだる）
1864年（元治元）	6／5	池田屋事件
	7／19	禁門の変
1867年（慶応3）	6／10	新選組、幕臣取り立て決定
	10／14	大政奉還
	12／9	王政復古の大号令
1868年（慶応4）	1／3	鳥羽・伏見の戦い
	1／6	慶喜、大坂城脱出
	1／12	新選組、船で江戸到着
	2／12	慶喜、上野・寛永寺に移る
	3／1	近藤ら甲陽鎮撫隊、甲府城へ出発
	3／2	甲陽鎮撫隊、日野に立ち寄る
	3／6	甲陽鎮撫隊、勝沼で官軍の攻撃に敗走
	3／11	永倉新八ら新選組脱退（靖共隊結成）
	3／14	勝海舟と西郷隆盛が会見
	4／1	官軍、千住に布陣
	4／2	近藤ら、千葉・流山に移動
	4／3	近藤勇、新政府軍に投降
	4／4	官軍の勅使、江戸城を訪れる
	4／11	江戸城、明け渡し
	4／25	近藤勇、処刑される
（明治元）	9／8	明治に改元
	10／26	旧幕府軍、五稜郭入城
1869年（明治2）	5／11	土方歳三、戦死

新選組誕生／幕末に夢を賭けた若者たち

清河八郎と近藤勇をつなぐ道

ペリー、来航

［嘉永6年（1853）］

アメリカのペリーが軍艦4隻を率いて日本に来航、開国を迫る。翌年、幕府はアメリカと条約を締結。5年後には、不平等な通商条約をアメリカ・イギリス・ロシアなどと締結。国の経済は混乱し、幕府の政策に対する批判が高まる。

［清河八郎、文武指南所開設］

18歳（1847年）で江戸にでてきていた山形庄内藩の郷士・清河八郎は、神田お玉が池に文武指南所を開設。「一挙にして天子を奉り錦旗を奉じ、天下に号令すれば即ち回天の大業を樹てん」という理念を持つ清河は、同志を集め、幕府打倒の挙兵を画策。

(財)清河八郎記念館蔵

清河八郎

(財)清河八郎記念館蔵

清河15歳の日記では「大名（たいみょう）を天下にとどろかさん」と記した

再現・清河が開いた文武指南所

［清河、身を隠す］

清河は幕府の密偵であったともいわれる町人を無礼打ちにしてしまい、追捕を避けて身を隠す。この間に、同志や清河の妻・蓮が囚われの身となる。

再現・捕らえられた清河の妻・蓮

清河八郎の墓

伝通院には浪士組を引率した清河八郎の墓がある。清河は倒幕の策を秘めたかどで京都から江戸に戻されたのち麻布一ノ橋で暗殺された

近藤勇、講武所教授内定取り消し

［文久元年（1861）秋］

武州多摩郡上石原村（東京都調布市）の出身で天然理心流師範の近藤勇は、幕府が設けた講武所の教授に内定していたが、秋、近藤が農民であるからという理由で内定取り消しの知らせが届く。

再現・近藤のもとには剣にすぐれた若者たちが集まっていた

近藤勇　(財)白虎隊記念館蔵

多田敏捷氏蔵

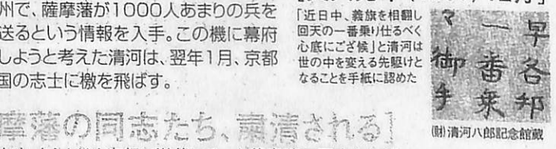
永倉の手記「浪士文久報国記事」によると、近藤たちは、稽古が終わると日々国の行く末を憂い、議論しあっていたという

清河、九州遊説で情報入手

［文久元年（1861）12月］

全国各地に遊説の旅を続けていた清河は、訪ねた九州で、薩摩藩が1000人あまりの兵を京都に送るという情報を入手。この機に幕府を打倒しようと考えた清河は、翌年1月、京都から全国の志士に檄を飛ばす。

「近日中、義旗を相翻し回天の一番乗り仕るべく心底にござ候」と清河は世の中を変える先駆けとなることを手紙に認めた



(財)清河八郎記念館蔵

［薩摩藩の同志たち、粛清される］

挙兵のため、あらかじめ京都に潜伏していた薩摩藩の同志たちが粛清される。清河は京都を去り、関東へ向かう。

17-18

清河の建言書、採用される

［文久2年（1862）12月8日］

再現・建言を記す清河。清河の策は、倒そうとしている幕府の懐に飛び込もうという奇想天外なものだった

清河の建言が幕府に採用される。主旨は、幕府の手で浪士であっても志を持つ者たちを募集して浪士組を結成、治安維持の役に立てるべきであるとするもの。建言書には、募集にあたって過去に罪を犯した者も特例をもって許すべしという一節が含まれ、捕らえられていた 清河の同志たちは次々に赦免。妻の蓮は獄中ですでに病死。

浪士組の募集、開始

［文久3年（1863）1月7日］

浪士組の募集開始。近藤は、土方・沖田・藤堂・永倉など自分の道場の仲間たちをともなって浪士組に加入。関東一円から集まった総数234人をもって浪士組が結成され、2月8日には京都に向けて出発。

浪士組、壬生村に分宿

［文久3年（1863）2月23日］

再現・「京へ来たのが将軍の警護のためというのはただの方便にすぎない。われらの真の目的は、尊王攘夷、つまり、朝廷を敬い外国勢力を打ち払うことにある」と清河は語ったという

浪士組は京都郊外の壬生村、現在の京都市中京区壬生の地に分宿。一足先に入京していた清河は、浪士組たちを前に、尊王攘夷という真の目的を宣言。用意していた建白書に血判を集め、翌24日、朝廷に提出。29日、天皇および関白から攘夷の勅諚と達しを受け取る。

［近藤ら、異議を唱える］

清河に対し「われらが京にやってきたのは都の治安を守り、将軍の警護をするためであったはず。しいて関東へ戻るというなら、われら同志13名は京に残り申す」と近藤勇以下、土方・沖田・藤堂・永倉たち近藤の仲間と芹沢鴨以下水戸脱藩の浪士たちが異議を唱える。

壬生浪士屯所の看板を掲げる

［文久3年（1863）3月12日］

再現・清河に異議を唱える近藤ら

再現・壬生に残った浪士たち

近藤以下、京都に居残ることを決めた浪士たちは、京都守護職を務めていた会津藩のお預かりとなり、以後壬生に壬生浪士屯所の看板を掲げる。翌日3月13日、清河以下、200人あまりの隊士は江戸へ向かう。

清河、斬殺

［文久3年（1863）4月13日］

幕府が放った刺客らが清河に斬りかかり、死去。

山形県立川町にある清河八郎の墓と傍らの妻・蓮の墓

佐々木タキ郎に切られる

壬生浪士組、徳川家茂を警護

［文久3年（1863）4月21日］

再現・隊旗

将軍・徳川家茂が京都から大坂に赴いた時、壬生浪士組は警護を申し出る。

再現・大坂に赴く徳川家茂

会津藩、薩摩藩と連合

［文久3年（1863）8月18日］

幕府を助ける立場にいた会津藩が薩摩藩と連合し、朝廷の実権を奪うことに成功。それまで朝廷内に勢力を持っていた長州藩と急進派の公家を追放。壬生浪士組は御所の警護を命じられる。

再現・御所の門の前で、浪士組の存在を知らない一部の会津藩士が槍を連ねて詰め寄るが、沈着冷静に誤解の解けるのを待った

［新選組を命名］

御所の警護を命じられた壬生浪士組は、会津藩から以後京都市中の見回りを命じるという内命を受ける。通達に記された隊の名は、新選組。会津藩の別動隊として、正式に存在が認められる。

再現・新選組誕生

再現・会津藩から京都市中の見回りを命じられる

壬生・前川邸の雨戸に残る文字「会津、新選組隊長、近藤勇」（通達の時に近藤が書いたといわれる）

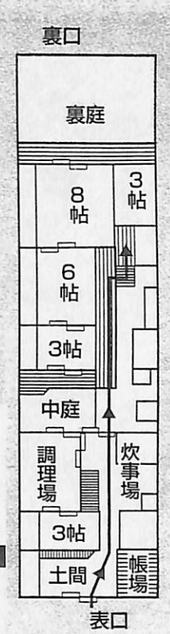
伝通院

小石川にある伝通院は、近藤勇以下、浪士組が上洛の旅の一歩を踏み出したところ。無量山伝通院寿経寺は徳川家康の母・於大の方の菩提寺になっている

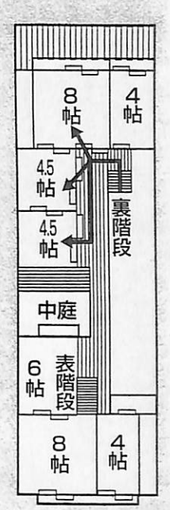
池田屋跡

新選組の存在を京中にとどろかせた池田屋事件。その跡は現在、三条通の繁華街のビルに面して石碑がポツンと立っている

池田屋を最初に探り出した近藤隊は10名のうち、6名で表口と裏口をかため、近藤、沖田、永倉、藤堂の4人で屋内に突入した。



〈1階〉



〈2階〉

激突

池田屋事変

祇園会所を出発した新選組は池田屋に闘い、負傷者を出しながらも倒幕派を斃し、市中放火計画を未然に防いだ。

●編成

新選組は34名の隊士を２分し、**近藤勇**が９名を、**土方歳三**が残る23名を率いていた。祇園（ぎおん）という遊興地を捜索する土方隊は、状況に応じてさらに隊を２分できるよう編成され、分隊は**井上源三郎**が10名を指揮することになっていた。近藤・土方両隊は鴨川両岸にローラー作戦を展開していたが、予定時刻になっても守護職等の諸藩兵の出動はなく、河原町通りを北上した近藤隊が三条通りに達したのは午後10時近くだった。

●池田屋

三条通りを東に折れた近藤隊は小橋付近まで進み、一軒の宿屋に踏み込んだ。**池田屋**（いけだや）である。近藤は宿の者に「御用改め」を行うことを告げると、主人が慌てて奥に駆け込む。あとを追って近藤が２階に上がると、そこに集会中の諸藩の倒幕派20数名がいた。**沖田総司**（おきたそうじ）が立ち向かってきた男を斬り、すぐに乱闘となった。屋内で闘う者、二階から外に飛び降りる者、階段を駆け下る者、これを隊士たちが迎え撃つ。途中から騒ぎを聞いた土方隊が駆けつけ、土方は井上の部隊を池田屋に突入させ、自分たちは周囲の警戒にあたった。また、ようやく出動してきた会津等の藩兵が、周辺に潜伏していた倒幕派の摘発に乗り出し、彼らとの闘いに死亡した者もあり、捕縛された者も多数あった。

池田屋での闘いは２時間ほど続き、最初に討ち入った近藤隊からは即死者１名のほか、**藤堂平助**（とうどうへいすけ）・**永倉新八**（ながくらしんぱち）等の負傷者を出し、重傷を負った２名は後日死亡する。倒幕派は宮部鼎蔵（みやべていぞう）ほか３名が屋内で斬死し、路上でも数名が死亡した。新選組は休むことなく周辺の残党狩りを行い、壬生に帰営したのは翌６日の昼過ぎのことだった。

19－20

甲陽鎮撫隊、敗走

新選組の夢・関東に散る／江戸城明け渡しの裏でなにが起きていたのか

鳥羽・伏見の戦い

［慶応4年（1868）1月3日］

徳川氏を中心とする旧幕府の軍勢と、薩摩・長州を中心とする新政府の軍勢が、京都の鳥羽・伏見で戦争を開始。新選組は、旧幕府軍の一員として、伏見奉行所に布陣。

右（土方歳三）は平柚三氏蔵

再現・負傷していた近藤勇に代わり指揮をとった副長・土方歳三

旧幕府軍、慶喜に出陣を願いでる

［慶応4年（1868）1月6日］

大坂城に敗退してきた旧幕府軍の部隊は、態勢を立て直し、新政府軍に一矢を報いようとして慶喜に出陣を願い出る。夜10時すぎ、慶喜はわずかな供をつれて大坂城を脱出。翌朝、軍艦開陽丸に座乗、江戸をめざす。

右（徳川慶喜）は茨城県立歴史館蔵

〈再現・部隊の長たちを前に慶喜は「よし是よりただちに出馬せん、皆々用意せよ」と言った

新選組、江戸到着

［慶応4年（1868）1月12日］

再戦かなわず、近藤ら新選組も軍艦に乗り江戸に向かい、品川沖に到着。20日、江戸市中に落ち着く。隊士の数はおよそ120人に減少。

再現・江戸市中に落ち着く新選組

慶喜、寛永寺に移る

［慶応4年（1868）2月12日］

朝廷から追討令を出されていた慶喜は、恭順の意を示すために江戸城を出て、上野の寛永寺に移る。近藤は、新選組隊士たちに慶喜の警護を指示。

［甲陽鎮撫隊、誕生へ］

近藤は、旧幕府軍の実権を握っていた勝海舟に、甲府城へたてこもり官軍を迎え撃ったらどうかと相談（したと考えられる）。軍資金5000両、大砲2門、銃200挺を与えられ、近藤は若年寄格、土方は寄合席格という大名旗本の名門に匹敵する地位に抜擢される。

(財)白虎隊記念館蔵　勝芳邦氏蔵

近藤勇

勝海舟

甲陽鎮撫隊、甲府城に向かう

［慶応4年（1868）3月1日］

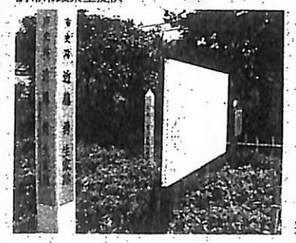
新選組にほかの武士たちも加えた甲陽鎮撫隊は、兵力およそ200で甲府城をめざして出発。

近藤・土方ら、故郷に立ち寄る

［慶応4年（1868）3月2日］

甲陽鎮撫隊一行は進路の途中にあった近藤や土方の生まれ故郷・日野に立ち寄り、行く先々で歓待を受ける。

調布市政策室提供



近藤勇の生家跡

再現・日野の人びとは、出世した郷土出身の英雄である近藤や土方を大歓迎

［勝沼で陣を張る］

中山道を進軍してきた官軍が、一足先に甲府城を確保。近藤は、勝沼に急ごしらえの陣を構築。3月6日、脱落者が続出し、120人ほどに減ってしまっていた甲陽鎮撫隊は、8倍以上の兵力を持つ官軍の攻撃を受けて敗走。

再現・土方は援軍を呼びに行く役に任ぜられ、近藤と離れた

「鳥羽・伏見の戦い」（玉里島津家蔵、鹿児島県歴史資料センター黎明館保管）
1868（慶応4）年1月3日、京都をめざした旧幕府軍は、鳥羽街道で待ち受けていた薩摩軍と戦闘になった。その砲声を聞き、伏見に陣を敷いていた新選組と会津軍も薩摩軍と戦闘を開始するが、ともに敗れて、大坂方面に退却する。図は『戊辰戦争絵巻』の着色版『錦の御旗』の一部で、左は旧幕府軍、右は薩摩軍。

近藤勇（港区立港郷土資料館蔵）

殉節両雄之碑
日野市にある高幡不動は土方歳三の生家の菩提寺。山門をくぐった左手に1876（明治9）年に建立された近藤・土方の顕彰碑がある

［土方、近藤に合流］

近藤は江戸郊外、五兵衛新田（足立区綾瀬付近）に移動。官軍と戦う姿勢を整えようとするなか、甲州で別れた土方が新たな隊士をともない、近藤に合流。また、江戸総攻撃予定日（3月15日）の直前、勝海舟が官軍の軍事責任者・西郷隆盛と会談、江戸の攻撃は見合わせとなる。

近藤、流山へ移動

［慶応4年（1868）4月1日］

官軍は、近藤たちが拠点を置く五兵衛新田に近い千住に布陣。兵力220人を超えた近藤たちは、五兵衛新田を出て千葉の流山へ移動、2日に到着。流山には、官軍の別の大部隊が迫る。

近藤、投降

［慶応4年（1868）4月3日］

流山に移動した近藤たちは、官軍の陣営に責任者が出頭するようにという呼び出しを受ける。近藤は土方の言をいれて切腹を思いとどまり、大久保大和という偽名を使って投降。

再現・土方は勝に近藤の救出を頼みにいく（隊士・中島登の覚書より）

勅使、江戸城へ

［慶応4年（1868）4月4日］

再現・江戸城を訪れた官軍の勅使

官軍の勅使が江戸城を訪れ、徳川家処分に関する朝廷の決定を伝える。『海舟日記』によれば、官軍には逆らわないという姿勢が認められ、徳川家存続が許され、慶喜の一命も助けられるという旨の内容だった。

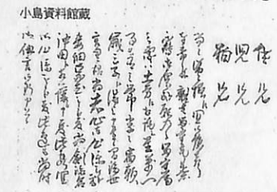
近藤への尋問、開始

［慶応4年（1868）4月8日］

板橋の東山道総督府で大久保大和（近藤勇）への尋問開始。官軍陣営に近藤を知る人物がいたため、近藤は正体を見破られ、のち処刑が決定。11日、江戸城が官軍に明け渡され、25日、近藤は斬首される。

再現・流山出陣についての尋問を受けるなかで、近藤は勝海舟との関係を否定

小島資料館蔵



自分が命を落とすようなことがあれば、自分の志は土方歳三が引き継いで叶えてほしい。天然理心流の名は沖田総司に継がせてほしい、と近藤が認めていた手紙